

「神道五部書」に見る
中世伊勢神道における外宮と内宮の関係

三重大学大学院人文社会科学研究科地域文化論専攻

1 2 2 M 2 0 2 橋本 朝陽

【目次】

序論	1
----	---

第一章 「神道五部書」の成立とその概要

第一節 「神道五部書」の成立について	3
--------------------	---

第二節 「神道五部書」の概要	8
----------------	---

第二章 「神道五部書」における天照大神と豊受大神の位置づけについて

第一節 先行研究における伊勢神道の両宮祭神の位置づけについて	14
--------------------------------	----

第二節 「神道五部書」における両祭神に関する記述に基づく考察	18
--------------------------------	----

結論	24
----	----

参考文献	25
------	----

序論

現在の伊勢神宮の外宮と内宮の関係については、その公式 H.P に「豊受大神宮は皇大神宮と共に、かつて「二所大神宮」と称されました。広大な御神徳と尊い御鎮座の由緒にもとづいて、殿舎、祭儀のほとんどが皇大神宮と同様であり、皇室の御崇敬もまた同様に捧げられています。しかし、両宮は決して同格ではなく、皇大神宮こそが最高至貴のお宮で神宮の中心です。」というように、¹天照大御神を祀る内宮が主体であり、外宮は食物神である豊受大神を祀るために内宮に付随していると説明される。

神道書や歴史書においても、内宮と天照大御神に関する記述が大半で外宮と豊受大神にはほとんど触れられていない。しかも記紀に関してみれば、内宮に関する記述も極めて少ないのである。例えば、『日本書紀』において伊勢内宮に関する記述は以下の垂仁天皇二十五年三月の条に限られ、外宮に関しては全く記述が見られない。

三月の丁亥の朔丙申に、天照大神を豊耜入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託けたまふ。

……故、大神の教の随に、其の祠を伊勢国に立てたまふ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち、天照大神の始めて天より降ります処なり。（『日本書紀』269-270）

また外宮に関しては、記紀を通じて『古事記』天孫降臨の記述に「登由気の神、こは度相に坐す神ぞ」（『古事記』p90）と記されるのみである。こうした事を踏まえる時、外宮を内宮との関係を通じて明らかにしようとする伊勢神道の神道書は、中世における両宮の関係を知ることができる貴重な資料であるといえることができる。

伊勢神道とは、伊勢神宮の祠官によって成立した神道説のことである。外宮の祠官である度会氏を中心に形成されていったため、度会神道・外宮神道とも呼ばれる。

伊勢神道は中世から近世にかけて展開した。度会延佳（1615-90）によって改めて広められた時期を後期伊勢神道、それ以前を中世伊勢神道と呼ぶ。本論においては、中世伊勢神道の中でも特に、伊勢神道が成立した初期に作成された「神道五部書」を研究対象とする。伊勢神道の研究は、江戸時代における儒学者や国学者による中世神道への批判が土台となっている。伊勢神道において中心となる「神道五部書」は成立年代や著者が明確ではないこと、および伊勢神道書の内容が儒教・道教・仏教などの用語や概念を援用することで成り立っているため古典の内容と矛盾することが研究の初期から指摘されてきた。

¹ 伊勢神宮ウェブサイト

しかし、明治時代以降になって伊勢神道を神道史の展開のなかに位置づけ理解しようとする歴史主義的観点から研究が行われるようになり、伊勢神道の意義が再評価されるようになった。神を主体とする神道説を構築することで、吉田神道から近世儒家神道に至る神道思想の展開の先駆けをなしたという歴史的役割が、宮地直一氏や西田長男氏によって提唱された。さらに、戦後の伊勢神道研究においては、中世神道の全体像と歴史的展開の解明が進展した。久保田収氏は、伊勢神道が成立した時代背景として、両部神道・山王神道・三輪流神道などの仏家神道との関係、元寇による神国思想の高まりと我が国固有の道の自覚などを指摘した。

現在においては、研究の視座や方法論そのものに加えて、伊勢神道の成立と中世的展開が主な研究の焦点となっている。²

そのうち、研究の視座や方法論については、仏家神道を含めた中世神道や中世思想全体の中に伊勢神道を位置付けようとした久保田氏の研究が嚆矢となっている。その影響を受けたものとして、思想史学の方法論を用いて末法思想や道家思想など伊勢神道が成立した思想史的背景について考察した高橋美由紀氏の『伊勢神道の成立と展開』や、歴史学・文献学の立場を踏まえて伊勢神道の成立を政治的な側面と神学的な側面から説明した鎌田純一氏の『中世伊勢神道の研究』などがある。

伊勢神道の中世的展開については、伊勢神道史と朝廷史・公武交渉史・幕府史・社会経済史との関係が考察されている。具体的には、伊勢神宮への信仰が広まった背景として役夫工米など社会制度の影響を考察した小島氏の『伊勢神道史の研究』などがある。伊勢神道の成立については、成立の契機や「神道五部書」の成立時期が論じられている。

このように、近代の研究により伊勢神道の価値が認められるようになった。しかし、伊勢神道における外宮と内宮の関係については研究の初期から取り上げられているにもかかわらず、意見の相違により現在でも議論が終結していない。現在では、伊勢神道について、第一に外宮祭神を尊貴たらしめることを目的として外宮祭神を天照大神の出生以前の神に当てようとしていること、第二に、二宮一光説を唱えて内外二宮相まって神威は発揚されると主張していることの二点の本質を持つ神道であるという説と、外宮祠官が外宮祭神を尊貴たらしめることを目的として唱道したのではないという説があり意見が分かれている。従来の研究は、伊勢神道を思想史や歴史との関係において捉えるものが多く、「神道五部書」の内容そのものについてはあまり取り扱われてこなかった。

そこで本論では、伊勢神道における両宮の関係性について「神道五部書」の記述に注目し、そこで具体的に内宮及び外宮がどのように位置づけられているかを明らかにすることを目標とする。概要は以下の通りである。

² (白山 [2010] p 33～39)

第一章 「神道五部書」の成立とその概要

第一節 「神道五部書」の成立について

第二節 「神道五部書」の概要

第二章 「神道五部書」における天照大神と豊受大神の位置づけについて

第一節 先行研究における伊勢神道の両宮祭神の位置づけについて

第二節 「神道五部書」における両祭神に関する記述に基づく考察

第一章 「神道五部書」の成立とその概要

「神道五部書」とは、『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』『豊受太神御鎮座本紀』『造伊勢二所太神宮宝基本記』『倭姫命世紀』の五つの書物を総称した呼称である。(以下、『倭姫命世紀』を除き、順に『御鎮座次第記』『御鎮座伝記』『御鎮座本紀』『宝基本記』と略称する。)³現代ではほとんど知られることがないが、伊勢神道の最も根本的な經典と位置づけられるばかりでなく、中世から近世において伊勢神道以後の様々な神道教説に大きな影響を与え続けた、神道界において最も重要な書籍といっても過言では無い。ここではまず、そうした「神道五部書」の成立に関わる先行研究を概観し、それを通じて本論の目指す意図を明らかにしていきたい。

第一節 「神道五部書」の成立について

「神道五部書」が一つのまとまりを持つものと考えられたのは、江戸時代の外宮神官出口(度会)延佳(1615-90)によるものとされる。久保田収氏によれば、『太神宮神道或問』(延佳の著 論者注)、では、五部書をその主張の據りどころとして援用してゐるのである。……すなはち、神宮三部書のほかに、寶基本記・倭姫命世紀に注目し、これを彼の説く太神宮神道の經典と考えてゐたものとみられる。」とされる。⁴『御鎮座次第記』『御鎮座伝記』『御鎮座本紀』の三書は伊勢神道成立の初期から「神宮三部書」として一括して取り扱われていたが、延佳はそこに『倭姫命世紀』と『宝基本記』を加え、「五部書」と称するに至ったのである。しかし、そうした五部の書はいずれも伊勢神道最初期の産物であるとともに、以後永く伊勢神道の根本經典としてばかりでなく、両部神道や吉田神道、更には近世の垂加神道等、様々な神道思想に大きな影響を与えた書でもあった。神道の世界において、中世から近世にかけて最も重要な經典と考えられたもの、それが「神道五部書」だったのである。

しかし、これらの書はいずれも古人に仮託された偽書であり、その著者や成立年代などについては、未だ定論に至っていない。ここではまず、「神道五部書」の成立過程等について、現段階までにどのように考えられてきたかを概観してみる。

「神道五部書」の成立年代と著者(撰集者)については奥書に記されており、いずれも飛鳥時代から奈良時代の伊勢神宮の祠官によって作成されたとされている。しかし、古代の

³ 以下本文での「神道五部書」からの引用は、すべて神宮司廳編『大神宮叢書 度会神道大成 前篇』(神宮司廳、1955)による。ただし引用に際しては返り点・助字を省き、また旧漢字は適宜新字体に改めた。また割注の部分はポイントを下げてそれを示した。

⁴ (久保田 [1959] p 28)

伊勢神宮の祠官の名が作者として記載されているのは権威付けのためであり、実際に作成されたのは鎌倉時代頃であることが明らかになっている。こうした五部書偽書説を最も早く主張したのが江戸時代の神道家吉見幸和（1673-1761）である。幸和はその著『五部書説弁』に次のように述べている。

…五部書共偽作スルトハ見ユレドモ、先彼徒ガ説ノ如キハ、鎮座伝記ハ、廿二代雄略ノ朝、太田命ノ宣ヲ承テ阿波羅波命ノ撰トシ、鎮座次第記モ同作トシ、鎮座本記ハ二十七代継体天ノ朝、飛鳥ノ撰トシ、倭姫世記ハ四十代天武ノ朝、御氣ノ撰トシ、宝基本記ハ四十五代聖武ノ朝、行基ノ撰ト云フ。然レドモ予熟読スルニ、宝基本記ハ最初ニ偽作シ、中頃ニ三部ヲ偽作シ、終ニ世記ヲ偽作スルカト察ス。何トナレバ、宝基本記ハ偽作ノ始メユヘ、稚々シクテ日本紀ノ文ヲ其儘ニ之ヲ挙ゲタリ。丹波ニ神幸ノ事モ之ヲ載セズ。三部ノ書ニ至テハ恣ニ大言シ、偽詐コト忌憚無シ。文章亦拙シ。其過言ノ恥ズ可キ事ヲ知テ、倭姫世記ニハ非ヲ隠シ詞ヲ飾テ、人ニ信ゼラレンコトヲ欲ス。然則五部編集時代此ノ如クアランカ。然ドモ共ニ大ナル偽書ニシテ、一トシテ証ス可キ者ナシ。（『五部書説弁』巻四、330-331）

五部書の奥書などによれば、それらは『御鎮座伝記』・『御鎮座次第記』→『御鎮座本紀』→『倭姫命世記』→『宝基本記』の順に、雄略町から聖武朝にかけて撰せられたとされる。だが幸和はそれらを全面的に否定するのである。幸和によれば五部書は「治承以後、永仁ヨリ少シ前」（巻一、259。治承一年は1177、永仁一年は1293）頃に偽作されたものであり、その制作も『宝基本記』→「三部書」→『倭姫命世記』の順であったろうと推定している。（「然バ五部書皆同時代ノ作ニシテ、此書（『宝基本記』）ヨリ少シ後ニ右四部ノ書、追々撰述セシト見ヘタリ。数多ノ神託此書ヲ受テ右四部書ニ載セ、次第ニ増補潤飾セシト見ユ。」（同上））

こうした幸和の五部書成立論はその後永く支持を得ることとなったが、昭和になり、さらに本格的な再検討が行われることとなった。

まず岡田莊司氏は、真福寺大須文庫に収蔵されていた『御鎮座伝記』について「軸木に記入された「行忠之」の確認により、本書の筆録者・当初の所持者は度会行忠であることが確認され、伊勢の「神道五部書」の一人の成立期が確定できたことになる。」と述べ、『御鎮座伝記』の成立に度会行忠（1236-1306）が深く関与していたことを指摘した。⁵ こうした岡田氏の研究に刺激され、西田長男氏は五部書の成立について、まず『宝基本記』が奥書に見える建保二年（1214）までには外宮神官の手によって成立し、その後残りの四

⁵（岡田〔2006〕 p 28）

書については文永（1264-75）・弘安（1278-88）前後に、『御鎮座本紀』を最後として偽作されたとの見解を示している⁶

一方久保田収氏は、「神道五部書」相互の類似する記述を比較し、その潤色の跡を辿る方法により、成立順を推定している。久保田氏によれば、「御鎮座次第記と御鎮座本紀は御鎮座伝記の文をもととした」ものであり、さらに「倭姫命世記の文をもととして、御鎮座伝記の文がつくられ、他に及んだ」として、五部書が『倭姫命世記』→『御鎮座伝記』→『御鎮座本紀』→『御鎮座次第記』の順に作成されたと述べている。⁷（『御鎮座次第記』の成立が最も遅いと推定される根拠として、氏は『御鎮座伝記』の真福寺本と神宮文庫本の奥書を比較し、真福寺本の「太神宮神祇本記上下・宝基本記上下・大田命訓伝・飛鳥記・神宮儀式・年中行事・氏本系・神郡神田帳・神戸本記祓本記」という記述が、神宮文庫本では「太神宮神祇本記上下・宝基本記・次第記・大田命訓伝・飛鳥記・神宮儀式・年中行事・氏本系・神郡神田帳・神戸本記祓本記」となっていることから、「真福寺本に御鎮座次第記の名がみえないことは、このときはまだこの書が成立してゐないことを示すものである。その後になって御鎮座次第記が成立したので、「神記第二」あるいは「次第記」としてこれを加へて、十二巻といふ巻数を合はせるために、宝基本記の「上下」二巻を、一卷としてしまったのであらう。したがって、神宮三部書の中では、御鎮座次第記がもっとも遅く成立したと考へられる。」と指摘している。）⁸

さらに『宝基本記』については、「内容が簡素であつて、倭姫命世記や神宮三部書にみるやうな複雑な思想や表現がみられないことも、本書が比較的早く出来たことを推測させる」とし、『宝基本記』の成立が最も早いものであったことを指摘するとともに、⁹同書の奥書に記された書写者名が「太神宮禰宜荒木田神主行真」など荒木田姓であることに注目する。外宮の神職が度会氏であるに対して、内宮の神職は荒木田姓である。つまり氏によれば、「もし、他の五部書の諸書と同様、度会氏関係者の手によって成りかつ傳へられたとすると、荒木田氏の名を列ねた奥書のあることは異様」である。そうした観点から氏は、「宝基本記はもともと内宮の祠官の手によって鎌倉時代の前期のころに成立したとみてよいであらう。」と述べている。¹⁰ こうした久保田氏の主張に対して、高橋美由紀氏は、五部書の記述の相違を「潤色」という観点から検討する点に疑問を呈している。高橋氏は「例えば、甲書と乙書に類似の記事があり、甲書が簡略で乙書が詳細である場合、果たして甲書に潤

⁶ （「度会神道成立の一斑一新出の『神祇譜伝図記』に沿って一」

『日本神道史研究』第四卷所収）

⁷ （久保田〔1959〕 p 68）

⁸ （久保田〔1959〕 p 43）

⁹ （同上 p 76）

¹⁰ （久保田〔1959〕 p 81～84）

色をくわえ乙書が成ったとみるべきか、或は乙書を簡略化して甲書が成ったとみるべきかはそう簡単な問題ではあるまい。」と指摘し、文章の緻密さを比較することで成立順を推測する久保田氏の方法を批判し、外宮の神に関する五部書の記述内容の変化を取り上げることでその成立過程を明らかにしようとする。¹¹

まず高橋氏が注目するのは、以下の「神宮三部書」の記述である（傍線は論者による）。

『御鎮座伝記』

天照坐皇太神則大日靈貴。故號日天子。以虚空為正體焉。故號天照神。亦止由氣皇太神則月天子也。故金剛神。亦名天御中主神。

『御鎮座本紀』

蓋聞。天地未剖。陰陽不分以前。是名混沌。萬物靈是封名虚空神。亦曰大元神。亦國常立神。亦名俱生神。希夷視聽之外。氤氲氣象中。虚而有靈。一而無體。故發廣大慈悲。於自在神力。現種々形。隨種々心行。為方便利益。所表名曰大日靈貴。亦曰天照神。為萬物本體。度萬品。世間人兒如母胎也。亦止由氣皇太神月天尊。

『御鎮座次第記』

古語曰。大海之中有一物。浮形如葦牙。其中神人化生。號天御中主神。亦名国常立尊。亦曰大元神。故號豐葦原中国。亦因以日天照止由氣皇太神也。

これらの記述を踏まえて高橋氏は次のように述べる。

…『伝記』の段階では内外両宮神を日天子・月天子に配して説くのに対し、『本紀』では新たに大元神たる国常立尊を登場させ、両宮の神をこの本源神たる国常立神が利益の方便として化現した神々と説くに至っているのである。……もし『本紀』が『伝記』に先行する書であれば『伝記』に於いてこの国常立尊と神宮三部書祭神との関係が言及されぬはずはないであろうから、『伝記』が述作された後に『本紀』が著わされたものとみるべきであろう。

さらに『御鎮座次第記』では「国常立尊を止由氣皇太神＝天御中主神の亦名として外宮神と関連づけようとしている。」と述べて、神宮三部書の成立について次のように主張する。

¹¹（高橋 [2010] p 89）

神宮三部書は祭神説に全く国常立尊の登場しない『御鎮座伝記』、内外両宮の神をともに大元神たる国常立尊の所化神とする『御鎮座本紀』、そして国常立尊を天御中主神の亦名として外宮神とのみ関連づけて説こうとする『御鎮座次第記』の順で成立したと考えられる。¹²

さらに氏は『倭姫命世記』について、それが神宮三部書に先行するものであることを次のように推定する。

その一つは外宮祭神論についての所説の相違である。……未だ神宮三部書の如き天御中主神との同体論にもとづく外宮神の皇祖神化の意図はみられず、豊受太神の神格は 元丹波国与佐郡比沼山頂麻奈井原坐御饌都神。亦名倉稻魂是也。

と説かれるにとどまっている。……三部書との相違点の第二は、前者には後者にみられるような道家思想の影響が全く存しないことである。これらの点を考えると、本書の成立は明らかに神宮三部書の成立に先立つものと思われる。¹³

¹² また『宝基本記』については、他の伊勢神道書とは趣を異にする記述が存在する点、肝心の内宮側自身が永仁年間の皇字論争¹⁴に於いて本書に否定的な態度を見せている点、また道家思想の顕著な影響が見られる点を踏まえ、「原形は鎌倉時代初期に内宮祠官の手によって成ったものの、後、外宮祠官の間に伝えられ度会行忠の手が加えられることによって現在のような形ができあがったのではないかということである。」と述べている。¹⁵そしてこれら諸点から、高橋氏は五部書の成立を、『宝基本記』又は『倭姫命世記』→『御鎮座伝記』→『御鎮座本紀』→『御鎮座次第記』の順であったと推定するのである。

こうした高橋氏の推定に対して鎌田純一氏は、内宮相殿神の記述から「神宮三部書」の成立過程を考察している。鎌田氏はまず『皇太神宮儀式帳』が内宮相殿神を天手力男命と幡豊秋津姫命としていることについて、「本来の相殿神の神名であろう」とした上で、『御鎮座次第記』も、

相殿神二座 左手力男神霊

右万幡豊秋津姫命霊

¹² (高橋 [2010] p 91 - 95)

¹³ (同上 p 97 - 100)

¹⁴ 外宮が豊受大神宮の社号に「皇」の字を付け加えたことから、その是非を巡って永仁四年 (1269) 内宮と外宮が論争になった事件

¹⁵ (高橋 [2010] p 101 ~ 103)

と同様であることを指摘した。ところが『御鎮座伝記』においては

相殿神二座 左天兒屋命霊 右太玉

命霊

御戸開前神二座 左手力男神霊

右万幡豊秋津姫命霊

とされ、手力男神と右万幡豊秋津姫命は「御戸開前神二座」とされる一方、「相殿神」は『御鎮座次第記』において外宮の「相殿神」とされる天兒屋命と太玉命が配されている（『御鎮座伝記』でもこの二神は外宮相殿神として重複して記載されている）。こうした点を指摘した上で、鎌田氏はさらに次の『御鎮座本紀』の記述に注目する。

天照太神相殿坐神二前、止由氣宮相殿神皇孫命奉陪従、故号止由氣宮相殿、而東西座給、自爾以住、以手力男神、万幡豊秋津姫命、（為）天照皇太神乃為相殿神坐。元是号曰御戸開神。

ここでは、天照太神の相殿神である天兒屋命と太玉命を皇孫命に陪従させ、天手力男神と萬幡豊秋津姫命を天照皇太神の相殿の神とすることで、『御鎮座次第記』『御鎮座伝記』のどちらの設定も取り入れたものとなっている。これらを踏まえ鎌田氏は、「成立順序としては、『御鎮座次第記』・『御鎮座伝記』・『御鎮座本紀』とみるのが妥当とみられるのである。」と新たな見解を示している。¹⁶

以上「神道五部書」の成立について先行研究の様々を見てきたが、「神宮三部書」の成立過程について未だ意見の一致を見ないというのが実情である。本論はそうした五部書の成立過程について考察する準備もなく、また論者にそれを明らかにする力もない。だが一点、本論が注目したいのは、以下詳しく見るように、両宮の記述には様々な相違点があるにもかかわらず、諸書が「神道五部書」として一体的な経典と考えられていたという点である。そこには五部書全体を通じたある大枠の理解があったのではないだろうか。本論では以下、特に両宮の祭神である天照大神と豊受神に関する諸書の記述を検討することで、そうした五部書全体の意図、とりわけ両宮祭神の位置づけを考察していきたい。

第二節 「神道五部書」の概要

ここでは「神道五部書」の記述のうち、特に天照大神と豊受大神の位置づけに関わるものに注目して、その内容を見ていきたい。

¹⁶（白山 [2010] p 179・180）

①『御鎮座次第記』

奥書から阿波羅波記あるいは阿波良波良波命伝とも称され、五部書の中で最も短く簡易なものとなっている。内容は前半に内宮、後半に外宮について説かれ、内宮関連の記述として天照大神の誕生から天孫降臨、五十鈴川上鎮座のこと、外宮関連の記述として豊受大神の神格と度会山田原鎮座のことが記される。またそれぞれに相殿と別宮の由緒などが併記されている。

内宮関連：

まず祭神である天照大神の誕生が説かれるが、その内容は、伊弉諾尊が国生みを終えた後、「吾、御寓すべき珍の子を生まんと欲ふ」（一書第一）として「日の神」（本文）としての大日靈貴を生むという『日本書紀』第五段の一書第一と本文をほぼつなぎ合わせたものとなっている。注目すべきは、それに続く天孫降臨に関わる記述である。

当神宝日出之時。天照大日靈貴与止由氣皇大神。予結幽契。永治天下以降。高天原神留坐。皇親神漏岐美命以。八百万神等天之高市神集々給。大葦原千五百瑞穂国。吾子孫可主之地。… 1

『日本書紀』において天孫降臨に関わるのは天照大神と高皇產靈神である。だがここでは天孫の降臨が予め天照大神と外宮の祭神たる止由氣大神によって結ばれていた「幽契」に基づき行われたとされている。そしてそうした降臨に関わる「幽契」は、天照大神のみならず、豊受大神をも皇祖神として位置づけようとする本書の意図と深く関わっている。

降臨する瓊瓊杵尊に関して、『御鎮座次第記』は割注に次のように記すのである。

天照大日靈貴太子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊子也。母止由氣皇太神太子高皇產靈神女万幡豊秋津師姫。夫天照大日靈貴尊与止由氣皇太神。亦名天御中主神是也。是天孫大祖也。故以高皇產靈神為皇親神。謂親者祖也。宗也。故属二祖之名。号皇御孫命也。 2

『日本書紀』第五段本文にも、瓊瓊杵尊が天照大神の子である天忍穗耳尊と高皇產靈尊の女栲幡千千姫（『古事記』では万幡豊秋津師姫）に生まれた子であるという記述はある。しかしここではそうした記紀の記述を超え、高皇產靈尊を止由氣神の子とし、それによって止由氣神（豊受大神）を瓊瓊杵尊の曾祖父、つまりは皇祖神として位置づけようとするのである。ここに外宮祭神の豊受大神を、内宮祭神の天照と同格の神とする意図を見ることができだろう。またさらに、止由氣神が『古事記』において原初の神と位置づけられる天御中主神と同体異名とされていることも注目される。

外宮関連：

まず祭神止由氣皇太神の神格が説かれるが、上述した止由氣大神と天御中主神との同体異名関係が前提となって記述が進められている。

記曰以代水徳未露。天地未成。瑞八坂瓊之曲玉捧九宮。即水變為天地起成。人民化生。名曰天御中主神。故千變萬化。受一水之徳。生続命之術。故名亦曰御饌都神也。古語曰。大海之中有一物。浮形如葦牙。其中神人化生。号天御中主神。亦名国常立神尊。亦曰大元神。故号豊葦原中国。亦因以日天照止由氣皇太神也。与大日靈貴天照太神予幽契。永治天上天下給也。3

ここで注目されるのは、止由氣神が水徳との関連で説かれること、そしてその水が天地や人民を化成するとされることである。つまり止由氣神は水をその本性とし、そのことがあらゆる生命を生み育む（「続命之術」）神として止由氣神を位置づけることにつながっている。またさらに注意すべきは、割注で天御中主神が『日本書紀』本文における原初の神である国常立神、さらには宇宙の根源を想起させる大元神と同体異名だと記されていることである。『日本書紀』によれば、天照大神は国常立神から派生した神である。しかしここで記述によれば、豊受大神もまた国常立神と同体異名であり、天照大神と豊受大神はその根源において同一であると主張されていることになるだろう。またここにも豊受大神と天照大神の「幽契」が語られていることに注意したい。

こうした止由氣神の神格についての記述に続くのは、崇神天皇三十九年、天照大神が丹波の吉佐宮に遷幸した折り、止由氣神が天下って、二神が「合明齊徳給。如天小宮之義。一处隻座。」（『御鎮座次第記』 p4）したという簡潔な記述であり、さらに雄略天皇二十一年に、伊勢に祭られている天照大神が、丹波与佐の魚井之原に祭られている止由氣神を伊勢の地に呼び寄せたとする記述が続く。この雄略天皇二十一年に関する記述は、外宮祭神に関する最も有名な伝承と深く関わっている。平安初期に成立したとみられる『止由氣宮儀式帳』には次のような記載がある。

吾一所耳坐波甚苦。加以大御饌毛安不聞食坐故爾。丹波国比治乃真奈井爾坐、我御饌都神。

等由氣太神乎。我許欲。（『止由氣宮儀式帳』 p45）

斎宮である倭姫命に対し、ある日天照大神が夢に現れ、「伊勢の地に一人いるのは甚だ苦しく、また食事にも満足に整わない。丹波の比治の真奈井に祭られている「我御饌津神」である等由氣太神を私のもとに呼び寄せてほしい」と告げた、というのである。この『止由氣宮儀式帳』に登場する止由氣神は、あくまでも「御饌津神」つまり天照大神に食事を奉仕する食物神である。そしてこの記事に類似する『御鎮座次第記』においてもまた、止由

氣神は「御饌安不聞」、つまり天照大神の食事が不自由であるという理由によって伊勢の地に招かれることになる。しかしこうした記述にもかかわらず、『御鎮座次第記』は、止由氣神をあくまでも「御饌津神止由氣皇太神」、つまり皇祖神の神格として扱っていることに注意すべきだろう。

外宮関係の記述としてはもう一点、別宮である多賀宮に関する以下の記述に注意したい。

多賀宮 止由氣皇太神荒魂也。伊弉諾尊到于筑紫日向小戸橘櫛原而祓除之時。洗左目。因以生日天子。是大日靈貴也。天下現名。曰天照太神之荒魂荒祭神是也。復洗右目。因以生月天子。天御中主靈貴也。天下降居而。名止由氣太神之荒魂多賀宮是也。 (『御鎮座次第記』 p 5)

ここでは豊受大神と天照大神が、それぞれ「月天子」「日天子」とされている。

②『御鎮座伝記』

奥書に基づき、大田命訓伝、または大田命伝記とも称される。内容は、前半が冒頭の猿田彦大神の託宣に続き、天孫降臨、天照大神が伊勢の地に鎮座する経緯が語られ、併せて相殿・別宮等の祭神について簡単な説明が加えられる。後半は豊受大神の出現とその神徳、天照大神との関係が記され、併せて相殿・別宮等の由来や祭神が簡単に説明される。また最後に神鏡の由来及び豊受宮御井神社の由緒が述べられる。御井神社に関する記述には、前項で見た豊受大神と水との関係が示唆されている。

注目すべき記述の一点目は天孫降臨に関わるものである。内容は降臨に際して瓊瓊杵尊に三種の神器が授けられることを描くものだが、そこには次のような記述がある。

以昔。天照太神。天御中主神。以天之御量言。賜天津彦彦火瓊瓊杵尊。天照太神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊子也。母天御中主神子高皇產靈神女栲幡豐秋津姫命。八坂瓊曲玉。八咫鏡。草薙劍三種宝物。(『御鎮座伝記』 p 9)

先の『御鎮座次第記』と同様、ここでも天御中主神が天照大神とともに皇祖神として天孫降臨に関わり、二神の「天之御量言」によって三種の神器を授けたとされる。

注目すべき二点目は豊受大神の出現とその神徳に関わる記述である。

豊受皇太神一座 天地開闢初。於高天原成神也。一記曰。伊弉諾伊弉冉尊。先生大八洲。次生海神。次生河神。次生風神等。以降。雖經廻一万余歳。水徳未露。天下飢餓。宇時二柱神天之御量事以。瑞八尺瓊勾玉捧九宮所化神。名号止由氣皇太神。千変万化。受一水之徳。生続命之術。故名曰御饌津神。古語曰。大海之中有一物。浮形如葦牙。其中神

人化成。号天御中主神。故号豊葦原中国。亦因以曰止由氣皇神也。故天地開闢初。神宝日出之時。御饌津神天御中主尊与大日靈貴天照太神二柱御大神。予結幽契。永治天下。或為日為月。永懸而不落。或為神為皇。常以無窮矣。光華明彩。照徹於六合之内矣。

(『御鎮座伝記』 p 13)

まず豊受大神が「天地開闢初」に「高天原」に成る神とされるとともに、また大八洲が生まれた後に、伊弉諾・伊弉冉が瑞八尺瓊曲玉を九宮に捧げる事により化成した神とされていること、さらにその本性が水と関わり、「続命之術」を生み出したこと、これについては前項『御鎮座次第記』とほぼ同一である。また、「古語曰」以下においても『御鎮座次第記』と同様の記述とともに「御饌津神天御中主」と天照大神の「幽契」について記されているが、一点、国常立神や大元神の名がここには記されていない。

三点目は、『御鎮座次第記』と同様に、天照大神と豊受大神とをそれぞれ「日天子」「月天子」と位置づける記述が見られるが（多賀宮に関する記述と興玉神の神託）、ここではさらに両祭神が、それぞれ火と水として捉えられている。

高貴神託宜。大土祖衢神等告覺給。天照太神則主火氣。而和光同塵。止由氣太神主水氣。

而萬物長養也。(『御鎮座伝記』 p 16)

豊受大神と「水」との関係は既に本書にも触れられていたが、ここではさらにそれが天照大神の「火」と対称的に捉えられている点に注意すべきだろう。

なお崇神天皇三十九年、及び雄略天皇二十一年に関わる天照大神と豊受大神との関わりについての記述は、『御鎮座次第記』とほぼ同じである。

③『御鎮座本紀』

奥書に基づき、飛鳥記ともいう。内容は天地初発の豊受大神の化生と天孫降臨に続き、崇神天皇三十九年の丹波吉佐宮での天照大神との「一处隻座」と雄略天皇二十一年の度会山田原への鎮座を記し、外宮天鏡や相殿、離宮、祝詞、神楽など諸点にふれるとともに、二祭神の尊位について記されている。

注目すべき一点目は、豊受大神の化生と天孫降臨の関係である。

天地初発之時。大海之中有一物。浮形如葦牙。其中神人化生。名号天御中主神。故号豊葦原中国。亦因以曰豊受皇大神也。与天照大日靈貴举此。以八尺瓊曲玉。八咫鏡。及草薙劍三種之神器。而授賜皇孫。… (『御鎮座本紀』 p 29)

「幽契」の語は無いが、豊受大神（天御中主神）が天照大神とともに天孫降臨に関わる神として位置づけられている。さらにまた、瓊瓊杵尊について、その母が「天御中主神子高皇産靈尊女」であるとする点は前掲二書と同様だが、それを踏まえて「天照皇太神。止由気皇太神二柱御大神。則天津彦火瓊々杵尊之祖神也」（『御鎮座本紀』 p 29）と、豊受大神の皇祖神としての位置づけをより明確に示しているといえよう。

二点目は、既に前掲二書でも触れられた崇神天皇三十九年の記述である。

天照太神遷幸但波乃吉佐宮。今歳。止由気之皇太神結幽契。天降居。…爾時天照皇太神与止由気皇太神。合明齊德焉。如天上之儀。一处隻座焉。（『御鎮座本紀』 p 30）

先に天孫降臨の場面で現れた「幽契」が本書ではここに登場する。この文脈から考える限り、少なくともここでの「幽契」は、二神が「天上之儀」のように、「一处隻座」することにあつたのでは無いかと推測される。一時の「一处隻座」の後、天照大神は吉佐宮から伊勢へ、止由気神は高天原へいったん別れる。しかし、それは再び両神が約束された伊勢の地で再会することを「幽契」がその内容として含意しているように読み取ることができるだろう。続く雄略天皇二十一年の記述において天照大神が豊受大神を伊勢に招くのは、二神によるそうした「幽契」の完結を意味するのではないだろうか。

三点目は、二祭神に関わる以下の記述である。

蓋聞。天地未剖。陰陽不分以前。是名混沌。万物靈是封名虚空神。亦曰大元神。亦国常立神。亦名俱生神。希夷視聽之外。氤氲氣象之中。虚而有靈。一而無体。故発広大慈悲。於自在神力。現種々形。随種々心行。為方便利益。所表名曰大日靈貴。亦曰天照太神。為万物本体。度万品。世間人兒如宿母胎也。亦止由気皇太神月天尊。地地之間。気形質実相離。是名渾淪。所顕尊形。是名金剛神。生化本性。万物惣体也。金則水不朽。火不焼。本性精明。故亦名曰神明。亦名大神也。任大慈本誓。每人随思雨宝。如龍王宝珠。利万品。如水徳。故亦御気都神也。金玉則衆物中功用甚勝。不朽不焼。不壊不黒。故為名。無内外表裏。故為本性。（『御鎮座本紀』 p 37）

二祭神が、対称的に語られていることを確認することができる。

なおまた、二祭神を日・月に配当する記述、豊受大神と水との関係を示す記載も複数確認することができる。

④『宝基本記』

主に両宮の造営や殿舎の模様をのべており、前掲「神宮三部書」とは趣を異にする。鎮座等に関する歴史的叙述は遷宮に関わるもの以外ほとんど無い。

注目すべき点は、まず両宮の宝蔵に言及した次の文である。

太神宮東西左右宝蔵。与于正宮之後。斯則大日靈貴。無上無貳之元神。故不立一塵。不翳一物。衆物普受日神之光胤。知早縁也。至于度会宮。与于正宮之前。是依広大慈悲本誓。施与地利。養万物為元因縁也。(『宝基本記』 p 50)

天照大神を「無上無貳之元神」とし、外宮祭神の名を一切出さない点、また天御中主神との関係などに全く言及しない点は、前掲三書と大きく異なる。ただし、度会の宮、即ち豊受大神に「慈悲本誓」「養万物」を配当する点、あるいは宝蔵の配置などに、両宮を対称的に把握しようとする方向性が見えるともいえる。

次には、両宮を日月・火水に対称的に配そうとする次の記述である。

棟文形事。皇太神宮者。日天図形。……五行中火性。五色中白色。故以白銅奉饗之。豊受宮者。月天(図)形。……五行中水性。五色中赤色。故以金銅奉饗之。(『宝基本記』 p 50)

千木片掞者。水火之起。天地之象也。故則日天之智義也。片掞者仰以開口。斯受月天之一水利萬品縁也。任水德。豊受皇太神號御氣都神也。向上天神開口也。向下地神含口也。是陰陽化德也。(『宝基本記』 p 51)

なお「原本裏書」として「古人秘伝云。伊勢両宮則胎金两部大祖也」(『宝基本記』 p 56)の記載がある。

⑤『倭姫命世紀』

天地開闢から天孫降臨、日向三代を経て崇神天皇時の天照大神と皇居との分離、その後伊勢にいたるまでの二十四カ所に渡る遷幸を詳細に記述するところに特徴がある。

注目するのは、冒頭、天地開闢の初めに「御饌津神」と「大日靈貴」が予め「幽契」を結んだとの記述があるが、それが天孫降臨と直接に結びつけられていない点、また瓊瓊杵尊に関しても、その父が高皇産靈尊と言及されるのみで、それが豊受大神や天御中主神に及んでいない点である。

だが、より大きな問題として、『日本書紀』の記述を大幅に上回る倭姫命の遷幸を、なぜこれほど詳細に記述しなければならなかったのかという点が挙げられる。

第二章 「神道五部書」における天照大神と豊受大神の位置づけについて

第一節 先行研究における伊勢神道の両宮祭神の位置づけについて

伊勢神道研究において、伊勢両宮の祭神問題についてはこれまでも重要なトピックとして取り上げられてきた。これについて白山芳太郎氏は次のように述べている。

伊勢神道における外宮と内宮の関係について、第一に外宮祭神を尊貴たらしめることを目的として外宮祭神を天照大神の出生以前の神に当てようとしていること、第二に、二宮一光説を唱えて内外二宮相まって神威は発揚されると主張していることの二点の本質を持つ神道であるという説と外宮祠官が外宮祭神を尊貴たらしめることを目的として唱道したのではないという説があり意見が分かれている。¹⁷

つまり、両宮祭神すなわち天照大神と豊受大神の位置づけについて、一説には二宮一光説という、両神は対等に位置づけられ、両神が一体として祭られることに意味を見いだそうとするもの、もう一説は、従来食物神として天照大神より神格が低く捉えられていた豊受大神を、天照大神と同等、さらにはより上位の神として位置づけようとするものがあったという。

こうした二説に関して、まず後者について見てみる。

外宮祭神優位説は、前章でも見た吉見幸和によって主張され始められたものとみられる。幸和は『五部書説弁』に次のように述べている。

幸和按、外宮祠官五部書ヲ撰スル主意如何ト云ニ、外宮祭神豊受神タルコトヲ忌ミ、天御中主・国常立尊ト称、神号ヲ私ニ変改セント欲ス。何者、豊受神ト申ハ御饌津神ニシテ内宮天照皇大神ノ御饌ノ事ヲ司ル神ナレバ、内宮トハ甚下落シテ諸人尊敬スルコト無し。然則初穂賽銭ヲ捧グル者ナク、檀那モ減少シテ祠官師職等貧窮ニ及事ヲ哀ミ、内宮ト相並ンコトヲ欲ス。(中略) 故ニ外宮ヲモ天照ト申ト、此ノ如ク衆人ノ耳目ヲ蔽ヒ、内宮ヨリモ却テ弥増ニ尊貴ノ神也、天神七代ノ第一ニシテ、天照大神モ尊仰シ玉フ御神也ト教テ、中世以来外宮祠官代々其事ヲ筆記シ、己ガ説ハ人ノ信ズマジキヲ悟テ、二所皇大神ノ託宣也ト称シ、或ハ猿田彦ノ神託、又ハ高皇産靈神託ト称シ、又倭姫ヲ雄略ノ朝マデ長寿也ト欺テ、倭姫ノ託宣ヲ述玉フト記シテ己ガ欺事ヲ隠シ、衆人ヲ誑ス。(卷之四、330)

幸和によれば、従来天照大神より神格が低く「諸人尊敬スルコト無」かった御饌津神としての豊受大神を祭る外宮は、「初穂賽銭ヲ捧グル者ナク、檀那モ減少シテ祠官師職等貧窮ニ及事」もあった。そうした状況に対して、外宮祠官らによって偽作されたのが五部書である。そこでは豊受大神は、「内宮ヨリモ却テ弥増ニ尊貴ノ神也、天神七代ノ第一ニシテ、天照大神モ尊仰シ玉フ御神也」と主張されるに至ったとされる。¹⁷吉見幸和に見られるこうした外宮祭神優位説については、先に触れた伊藤聡氏も五部書の内容の検討から同様の見解を示している。

伊勢神道が目指したのは、豊受大神宮(外宮)が皇大神宮(内宮)と同格(さらには優越)であることを示すところにあった。天照大神を祀る内宮(禰宜荒木田氏)に対し、その供膳神とされた豊受大神を奉ずる外宮は下位に位置づけられていた。しかし、伊勢国造の系譜を引く度会氏にとって、その状況を打破することは長年の悲願だった。¹⁸

こうした主張を、伊藤氏は次の『御鎮座伝記』の記述などから導き出している。

一記日。伊弉諾伊弉冉尊。伊會那天妃先生大八洲。次生海神。次生河神。次生風神等。以降。雖經廻一萬餘歳。水徳未露。天下飢餓。于時二柱神天之御量事以。瑞八坂瓊之曲玉捧九宮所化神。名號止由氣皇太神。千變萬化。受一水之徳。生續命術。故名曰御饌都神也。

こうした記述について、伊藤氏は次のように述べている。

水徳が変じて天・地・人となり、それが天御中主となり、これが「御饌津神」＝豊受大神であるとするのである。天照大神が登場するのはこの後のことであり、豊受大神をもって根源神に宛て、内宮に対する外宮の優越を暗示するのである。¹⁹

たとえば豊受大神を天地開闢の造化神たる天御中主と同体と説く。このことで、豊受大神が天照大神より先行する根源神たることを示そうとしたのである。

¹⁷ (白山 [2010] p 19)

¹⁸ (伊藤 [2020] p99)

¹⁹ (伊藤 [2016] p 164)

また、両部神道説の胎金不二説を内外両宮に配当することで、その対等を主張し、併せて五行説に基づいて、外宮を水徳、内宮を火徳に配当している。五行相克説に基づけば、火克水であるから、これが外宮の優越を含意していることは明白だろう。²⁰

こうした外宮祭神優位説に対して、冒頭に述べたもう一つの説、つまり内外両宮は対等に位置づけられ、両祭神が一体として祭られることに意味を見いだそうという見解を支持するものとして、久保田氏、岡田氏、白山氏の見解がある。

白山氏はまず、『宝基本記』の奥書にある建保二年に荒木田氏良が書写したという記述について「建保二年の奥書が架空のものだとすると、その筆者である内宮一禰宜荒木田氏良といえはまた記憶に新しいこの時期に、氏良に仮託するということは、他の伊勢神道書が飛鳥時代の人物に仮託したり、奈良時代の人物に仮託したりしているのに比して、余りに新しすぎる」とし、その奥書を「通説どおり、信じてよい」と述べる。そしてその上で、永仁四年から永仁五年(1296～1297)にかけての皇字訴訟よりかなり前の建保二年(1214)以前に『宝基本記』が作成されていたことから、「外宮祠官が内宮祠官との政治的拮抗を有利にするため生ぜしめたものではない」として、神道五部書が皇字訴訟において外宮の優位を主張するために記されたわけではないと主張する。²¹

さらに氏は、『宝基本記』に内宮祭神を「無上無二の元神」と称えていること、内宮祭神を唯一絶対視して、「衆物、普く日神之光胤を受く」としていることから、「伝承の骨格は、内宮奉仕の荒木田伝承と考えてよいであろう」と『宝基本記』の根底に内宮側の伝承があることを指摘した。²²そして、『宝基本記』と『倭姫命世記』が五部書の中心であり、外宮側で加上された部分が中心であったのなら、皇字訴訟が結審した後、伊勢神道は衰退したはずであり、伊勢神道がその後も継続し得たのは、伊勢の神明奉仕の伝統より得られた体験的思想だったからである。」と伊勢神道は両宮の神職に共通する思想であると述べた。²³²⁴そして、結論として、「かかる訴訟以前成立の伊勢神道書は、外宮側が訴訟を有利にするために著した政治的著作などであるはずがなく、神宮神職としての敬神思想を記した書であった。」と伊勢神道が作成された目的が、神宮に仕える神職としての心得を示すことにあったとしている。²⁴

一方久保田氏は、次のように指摘する。

²⁰ (伊藤 [2020] p 100)

²¹ 同上

²² (白山 [2010] p 33～39)

²³ (同上 p 24・25)

²⁴ (同上 p 27・28)

宝基本記では、両宮を並立せしめてゐる。たとへば、『皇太神宮は、日天の図形、六合の中、心体独り在り。天真に任すが故に明白なり。五行中の火性、五色中の白色、故に白銅を以てこれを饒り奉るなり。』とするに対し、『豊受宮は、月天の図形、八洲の中、平等圓滿の心体の縁なり。五行中の水性、五行中の赤色、故に金銅を以てこれを饒り奉る。』として、両宮を日天・月天となし、火性・水性となして、これを並べてゐる。また、千木についても、同様、両宮相並べてこれを説いてゐる。この五行説による説明はともかくとして、両宮を日輪と月輪とになぞらへ、両者を不離並立の関係にみるばかりでなく、大日靈貴を『無上無次の元神』と述べるから、外宮の祭神をことさらに尊貴ならしめようとする意図はみられない。²⁵

このように久保田氏は、両宮を不離並立の関係とする。そして、両宮が並立の関係であることから、「従来、伊勢神道は、外宮祠宮が内宮に対抗するため、その所祭神を尊貴ならしめようとしたと説くものが多いが、さうした一面が全く無いとはいへないにしても、これはその主要な目的ではなかった。」と述べ、伊勢神道は外宮を尊貴にすることを目的として作成されたわけではないと述べている。²⁶

一方岡田氏は、『宝基本記』の次の記述に注目している。

棟文形事。皇太神宮者。日天圖形。六合之中。心體獨存。任天與明白也。五行中火性。五色中白色。豊受宮者。月天形。八洲之中。平等圓滿之心體縁。五行中水性。五色中赤色。金銅奉饒之。

千木片掞者。水火之起。天地之象也。故則日天之智義也。片掞者仰以開口。斯受月天之一水利萬品縁也。任水德。豊受皇太神號御氣都神也。向上天神開口也。向下地神含口也。是陰陽化德也。

ここでは両神宮神殿それぞれの「棟の文形」と「千木の片掞^{かたそぎ}」の形に関して、それらが皇太神宮では日天と火性、豊受宮では月天と水性になぞらえられており、そのことは「陰陽説に基づき両宮を並立してゐる」ことを示しているという。こうした点から氏は、「まづ第一にいへることは、特に外宮を優越させた内容ではなく、内外両宮を並立し同格に扱つてゐる点であらう。」と述べ、内宮と外宮は並立で同格とされていると主張する。²⁷そのうえで、伊勢神道において内宮と外宮は並立の関係とされているため外宮を尊貴にしようとする意図はなかったという久保田氏の意見に対し、次のように述べる。

²⁵ (久保田 [1973] 478・479)

²⁶ (久保田 [1973] 478)

²⁷ (岡田 [1894] 29・30)

度会神道成立の初期にあつて、それまでの内宮優位から両宮を並立しようとしたのは、やはり外宮側ではなかったか。それを天御中主・国常立尊と結びつけ外宮優位を主張するのは、さらに後のことで、成立初期の段階では当時盛んに流布されてゐた両部習合説や新たに陰陽説を巧みにとり入れて、まづ外宮を内宮と同格に押し上げるところから始まったと考えられる。²⁸

氏によれば五部書は、外宮の地位を、優位な状態にあった内宮と同格にまで高めるために外宮と内宮が並立の関係であることを強調したものであると述べている。（岡田 [1894]）

以上のように、「神道五部書」において両宮の祭神がどのように位置づけられていたかについては、未だ定論がない状況である。一説では「五部書」は外宮祠官により作成され、外宮祭神である豊受大神を内宮祭神である天照大神よりも優位の神と位置づけようとした書だとされる一方、一説では「五部書」において両祭神はあくまでも対等・同格の神として位置づけられているとされる。どちらが正しいであろうか。

本論は以下、『神道五部書』における両祭神に関わる記述を整理することによって、この問題について論者なりの結論を出していきたいと考える。

第二節 「神道五部書」における両祭神に関する記述に基づく考察

「神道五部書」における両宮祭神の記述について、その特徴をまとめてみたい。

①両祭神の対称性

まず、『神道五部書』における外宮と内宮の祭神は、水と火、月と日、あるいは金剛界と胎藏界というように対称的なものに例えられている点が特徴的であるといえる。

例えば『御鎮座伝記』及び『御鎮座次第記』には以下の記述がある。

興玉神託宣。天照坐皇太神則大日靈貴。故號日天子。以虚空為正體焉。故號天照神。亦止由氣皇太神則月天子也。故金剛神。亦名天御中主神。以水徳利萬品故亦曰御饌都神。
（『御鎮座伝記』 p18）

²⁸ （同上 30・31）

(興玉神が託宣された。「天照坐皇太神は大日靈貴であるので日天子という。虚空を正体とするので天照神という。止由氣皇神は月天子であるので金剛神という。また天御中主神という。水徳により万物に利するので御饌都神という」と。)

伊弉諾尊到于筑紫日向小戸橘櫛原而祓除之時。洗左目。因以生日天子。是大日靈貴也。天下現名。曰天照太神之荒魂荒祭神是也。復洗右目。因以生月天子。天御中主靈貴也。天下降居而。名止由氣太神之荒魂多賀宮是也。(『御鎮座次第記』 p5)

(伊弉諾尊が筑紫日向の小戸橘櫛原に到って祓除の時、左目を洗い、因って日天子が生まれた。これが大日靈貴であり、天下に現れて天照太神の荒魂荒祭神というのがこれである。また右目を洗い、因って月天子が生まれた。天御中主靈貴である。天下に下り降りて、止由氣太神之荒魂多賀宮と名付けられたのがこれである。)

このように天照大神を「日」に、豊受大神を「月」に配する記述は、「五部書」の中に数多く見られる。確かに天照大神が「日天子」と呼ばれることは、正史としての『日本書紀』にも記述があり、当時の人々にも広く膾炙されたものであろう。『日本書紀』第五段本文に伊弉諾尊・伊弉冉尊が国生みを終えた後、「吾已に大八洲国及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」として「日の神を生みまつります」と記されるのがそれにあたる。しかし同第五段本文が「日の神」と並んで「月の神」とするのは「月弓尊、月夜見尊、月読尊」であり、豊受大神ではない。既に見たように、豊受大神は記紀において『古事記』天孫降臨において「次に登由氣の神、こは度相に座す神ぞ」とされる以外、全く記述がないのである。ここに「五部書」が敢えて豊受大神を天照大神と並列し対称的な位置におこうとする意図が窺える。

こうした対称的な位置づけは、『御鎮座本紀』の

「天照太神宮御形。象日天尊位坐也。止由氣太神宮形。象月天尊位也。」(『御鎮座本紀』 p38)

といった記述にも端的に窺えるものであるが、こうした対称性はまた、「火」と「水」との対称性へと連続するものとして理解されている。同じく『宝基本記』には次のような記述がある。棟文形事。皇太神宮者。日天図形。……五行中火性。五色中白色。故以白銅奉饗之。豊受宮者。月天(図)形。……五行中水性。五色中赤色。故以金銅奉饗之。(『宝基本記』 p50)

(棟の文形の事。皇太神宮は日天の図形。……五行の中では火性にあたり、五色の中では白色にあたる。よって白銅でこれを飾り申し上げる。豊受宮は月天の図形。五行の中では水性にあたり、五色の中では赤色にあたる。よって金銅でこれを飾り申し上げる。)

多くの先学によって『宝基本記』には道教的要素が多く含まれているとされるが、ここでは「日」「月」のそれぞれが五行や五色との関係で「火」と「水」に関連付けられている。そして「火」と「水」の対称性は、『御鎮座伝記』の次の記述に端的に示されている。

高貴神託宣。大土祖衢神等告覺給。天照太神則主火氣。而和光同塵。止由氣太神主水氣。

而萬物長養也。

（高貴神の託宣。「天照太神は火の氣の主、和光同塵。止由氣太神は水の氣の主、萬物を長く養う。」と）（『御鎮座伝記』p16）

またこうした対称性は、両宮神殿の千木の形態にも関係づけられている。『宝基本記』には次のように記されている。

千木片挾者。水火之起。天地之象也。故則日天之智義也。片挾者仰以開口。斯受月天之一水利萬品縁也。任水徳。豐受皇太神號御氣都神也。向上天神開口也。向下地神含口也。是陰陽化徳也。（『宝基本記』p51）

（千木の先を斜めにそぎ落とした部分は、水と火の起り。天地の象徴。そのため、日天の智義である。そぎ落とした部分は仰ぐことで口を開く。ここに月天の水の利益を受けて万物に恵みを与える。こうした水徳により豊受皇太神を御氣都神という。（天神は上を向けて口を開け、地神は下に向いて口を閉じる。）これが陰陽が万物を生み出す働きである。）

ところで、「日」の神である天照大神が「火」と関連付けられるのは一般的に理解しうるが、「月」の神である豊受大神はなぜ「水」と関連付けられるのだろうか。この点については次のような記述を見ることができる。

天照坐止由氣皇太神一座在度会郡山田原 記曰以代水徳未露。天地未成。瑞八坂瓊之曲玉捧九宮。即水變為天地起成。人民化生。名曰天御中主神故千變萬化。受一水之徳。生続命之術。故名亦曰御饌都神也。古語曰。大海之中有一物。浮形如葦牙。其中神人化生。号天御中主神。亦名国常立神尊。亦曰大元神。故号豐葦原中国。亦因以日天照止由氣皇太神也。（『御鎮座次第記』p3）

（昔、水の徳がまだ現れず、天地がまだ出来ていなかった時、瑞八坂瓊之曲玉を九宮に捧げ、水が変化して天地となり、人間も生まれた。水徳の名を天御中主神という。千變万化する水の徳を受け、命を続ける術を生んだので御饌都神とも言う。古語によると、大海原の中に一つのものであり、浮かぶ形は葦の芽の形の様だった。その中に神が生じた。天御中主神という。（また国常立神尊とも、また大元神ともいう）。故に豐葦原中国という。またそのため天照止由氣皇太神という。）

豊受皇太神一座。天地開闢初。於高天原成神也。一記曰。伊弉諾伊弉冉尊。古語曰伊舍那天伊舍那妃。先生大八洲。次生海神。次生河神。次生風神等。以降。雖經廻一萬餘歳。水徳未露。天下飢餓。于時二柱神天之御量事以。瑞八坂瓊之曲玉捧九宮所化神。名號止由氣皇太神。千變萬化。受一水之徳。生續命術。故名曰御饌都神也。〔『御鎮座伝記』 p13〕

（天地開闢の初めに、高天原に神が出現した。伊弉諾尊大自在天伊弉冊尊という。二神はまず大八洲を生み、次に海の神を生み、次に河の神を生み、次に風の神を生んだ。それで以降一万年以上経ったが、水徳が出現せず、地上は飢餓に苦しんだ。そこで二柱の神は、瑞八坂瓊之曲玉を天に捧げた。その時に生まれた神を止由氣皇太神と名づけた。様々に変化し、水徳を受け、命を続ける術を生み出したので御饌都神という。）

豊受大神（止由氣皇太神）は、『御鎮座次第記』では天地創世にかかわる天御中主神、さらには国常立神や大元神といった根源的な神と同一とされているのに対して、『御鎮座伝記』では、「天地開闢初」に「高天原」に成った神とされる一方、海神・河神・風神などが生みだされた後に伊弉諾・伊弉冉が瑞八尺瓊曲玉を九宮に捧げることによって化成した神とされている。（さらに言えば、前述の『御鎮座次第記』の記述では、荒魂ではあるが、伊弉諾が筑紫の日向で祓いをした折りに化成した神とされていた。）このように「五部書」では両祭神の誕生に関する記述に多くの相違が見られる。だがそうした一見矛盾するように思える記述を含んだ諸書が一つのまとまった経典として捉えられていた点に「神道五部書」の特徴がある。ところで豊受大神と「水」との関係は、両書ともにこの神が「続命術」をなしたことにあるとしている。『御鎮座伝記』によれば海神などが生み出された後、一万年にわたり「水徳」が現れず、天下が飢餓に陥った。それを救うため現れたのが豊受大神だとされる。つまり、ここでの「水」は万物を「長養」し、人々の命を支えるものであり、豊受大神は、『御鎮座本紀』によれば「任大慈本誓。每人随思雨宝。如龍王宝珠。利万品。如水徳。」、つまりその大慈に基づき人々に思いのままに宝の雨を降らし、恵みを与える神として捉えられているのだといえるだろう。それはまさに、食物神（御饌都神）として捉えられてきたその性格が、特徴的に表れているといえよう。そしてここに豊受大神が、「火」＝「日」として万物に恵みをもたらす天照大神に対する対称的な存在として位置づけられている様を見ることができる。

②皇祖神としての両祭神

一般に皇祖神といえは、天照大神や高皇産靈尊を指すものとされる。それは、記紀の天孫降臨の場面において、降臨する瓊瓊杵尊が天照大神の子である天忍穗耳尊の子、即ち天照大神の孫であることによる。『日本書紀』第九段本文は次のように記述されている。天照大神の子正哉吾勝速日天忍穗耳尊、高皇産靈尊の女栲幡千千姫を娶きたまひて、天津彦彦火瓊瓊杵尊を生れます。故、皇祖高皇産靈尊、特に憐愛を鍾めて、崇て養したまふ。遂に皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊を立てて、葦原中国の主とせむと欲す。

こうした記述は『古事記』もほぼ同様であり、相違点は高皇産霊尊の女の名が万幡豊秋津師姫となっている点のみであるといつてよい。つまり記紀において豊受大神は全く皇祖神としての性格付けがなされていないのである。

これに対して「神宮三部書」にはすべて、皇孫瓊瓊杵尊に関して次のような記述が見られる。(傍線は論者による)

天照大日靈貴太子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊子也。母止由氣皇太神太子高皇産霊神女万幡豊秋津師姫。夫天照大日靈貴尊与止由氣皇太神。亦名天御中主神是也。是天孫大祖也。故以高皇産霊神為皇親神。謂親者祖也。宗也。故属二祖之名。号皇御孫命也。(『御鎮座次第』 p2)

天照太神太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊子也。御母天御中主神子高皇産霊神女栲幡千姫命也。(『御鎮座伝記』 p9)

天照太神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊子也。母天御中主神子高皇産霊神女栲幡豊秋津姫命也。…夫天照皇太神。止由氣皇太神二柱御大神。則天津彦火瓊々杵尊之祖神也。故名曰皇孫命者也。(『御鎮座本紀』 p29)

これらに共通するのは、天孫瓊瓊杵尊が高皇産霊神の女である栲幡千姫（万幡豊秋津師姫）であるという記紀の記述を超えて、さらに高皇産霊神が天御中主神＝止由氣皇太神の子であるとする点である。すなわち、豊受大神は高皇産霊神の親として皇孫瓊瓊杵尊の曾祖父に位置づけられ、天照大神と並ぶ皇祖神の地位にあることが示されているのである。(瓊瓊杵尊に対して天照大神が祖父であり、豊受大神が曾祖父であるとされて、そこに非対称が生じているのは、三部書の記述が高皇産霊神を祖父とする記紀の記述を無視できなかったからではないだろうか。) こうした豊受大神の位置づけは、三部書の書名自体にも現れている。それらは「伊勢二所皇太神宮」「伊勢二所皇太神」あるいは「豊受皇太神」と「皇」の字が冠されている。「皇」の字は、それが皇祖神であることを示すものである。既に見た皇字訴訟に見られるように、豊受大神を皇祖神として位置づけたことは、「神道五部書」の重要な主張であり、そこに内外両宮の祭神を同格の神と捉えようとする「五部書」の意図があったといえるだろう。

またここでさらに注目すべき点は、豊受大神（止由氣皇太神）が天御中主神と同名異名の神とされている点である。上に見たように、豊受大神は天照大神とともに皇祖神として位置づけられた。そして『日本書紀』によればそうした天照大神は国常立神の直系の神とされる。一方、前項目で見たように、天御中主神は「亦名国常立神尊。亦曰大元神。」(『御鎮座次第記』) とされていた。とすると、皇祖神としての天照大神と豊受大神は、その根源に

において『日本書紀』において原初の神とされる国常立神に、さらには宇宙の根源を意味する大元神に収斂するものと捉えられていたということになる。「五部書」において共に皇祖神として対称的に位置づけられた両神は、その根源を一にするものであり、それが日月や火水といった機能に分化し、その働きに応じて二つの祭神として現れたものだと考えられていたのではないだろうか。

③「幽契」について

「五部書」に特徴的な記述として、『宝基本記』以外に見られる「幽契」を挙げるができる。「幽契」の語は、『古語拾遺』に「始在天上。預結幽契。衢神先降。深有以矣。」などとあるが、そこでは猿田彦が天照大神を伊勢の地へと導くことが内容であり、豊受大神とは関わりの無いものとなっている。([『古語拾遺』 p 8) これに対して「五部書」では、両祭神に関わる極めて重要な言葉となっている。

当神宝日出之時。天照大日靈貴与止由氣皇大神。予結幽契。永治天下以降。高天原神留坐。皇親神漏岐美命以。八百万神等天之高市神集々給。大葦原千五百瑞穂国。吾子孫可主之地。… ([『御鎮座次第記』 p 1)

故天地開闢初。神宝日出之時。御饌津神天御中主尊与大日靈貴天照太神二柱御大神。予結幽契。永治天下。或為日為月。永懸而不落。或為神為皇。常以無窮矣。光華明彩。照徹於六合之内矣。 ([『御鎮座伝記』 p13)

御間城入彦五十瓊殖天皇卅九歳歳壬戌。天照太神遷幸但波乃吉佐宮。今歳。止由氣之皇太神結幽契。天降居。 ([『御鎮座本紀』 p30)

天地開闢之初。神宝日出之時。御饌津神与大日靈貴。預結幽契。永治天下。言寿宣。肆或為月為日。永懸而不落。或為神為皇、。常以無窮矣。光華明彩。照徹於六合之内以降。… ([『倭姫命世紀』 p8)

語られる場面は『御鎮座次第記』が天孫降臨、『御鎮座本紀』と『倭姫命世紀』が「天地開闢初」、『御鎮座本記』が崇神天皇三十九年に止由氣神が丹波の吉佐宮に天下って天照大神とともに祭られた時と異なっているが、いずれにも共通するのが「幽契」が天照大神と豊受大神の間に結ばれたものとされていること、及びそれが「或為日為月」「或為神為皇」ことによって二神がこの国を「永治天下」ことと密接に結びついていることである。唯一「永治天下」等の記述の無い『御鎮座本紀』においても、その後の行文では、「爾時天照皇太神与止由氣皇太神。合明齊徳焉。如天上之儀。一处隻座焉。」 ([『御鎮座本紀』 p30) とさ

れ、さらに吉佐宮から天照大神は伊勢へ、止由氣神は高天原へいったん別れるものの、それは再び両神が約束された伊勢の地で再会し、「一處隻座」することが「幽契」の内容として含意されているように読み取ることができる。「五部書」において「幽契」は、両祭神が「一處隻座」し対等の立場でこの国を治め、人々に豊かな恵みを与えることを約したものであるとして語られた言葉であったと推定されるのである。

このことと関わり、最後に「五部書」の多くの記述が、両祭神がいかにして伊勢の地に鎮座することとなったのか、その歴史的経緯の叙述に割かれていることは、その理解にとって重要なことであることを指摘しておきたい。既に見たように『倭姫命世紀』では天照大神がいかにして伊勢の五十鈴川の川上にたどり着いたかが『日本書紀』よりも遙かに詳しく記述されていた。また『御鎮座本紀』は豊受大神が伊勢の山田原に鎮座する経緯が詳述されていた。こうした歴史的経緯を語ることはどのような意味があるのだろうか。このことを理解するの一つの手がかりとなるのが『御鎮座伝記』の次の記述である。（『倭姫命世紀』にもほぼ同様の記述がある。）

于時倭姫命詔。南山末見給。吉宮地覓幸給。今歳。猿田彦大神参。乃言寿覚白。南大峯有美宮处。佐古久志呂宇遲五十鈴之河上者。大八洲之内珍図之霊地也。随翁之出現。二百八万余歳之前。未現知在霊物。照輝如大日輪也。惟小縁之物不在。定主出現御座耶念。倭姫命曰。理実灼然。惟久代天地之大祖。天照皇太神。天御中主神。并神魯伎神魯美命誓宣。豊葦原瑞穂国之内。伊勢加佐波夜之国。有美宮处。見定給。自天上。投降居給。天之逆太刀。天之逆鉾。大小之金鈴五十口。日之小宮之図形文形等是也。

（『御鎮座伝記』 p11）

「美宮处」を探し求めた倭姫命は猿田彦から、「霊物」が大日輪のごとく光り輝いている霊地が五十鈴川の川上にあると聞いた。それはまさしく天照大神と天御中主（豊受大神）による誓いの地であり、光り輝く「霊物」は、かつて二神が天上から自らの宮処の目印として投げ下ろした天の逆太刀や天の逆鉾であったという。鎮座にまつわる歴史的経緯の叙述は、まさに伊勢の地が両祭神にとって予め約束された霊地であり、そこに現に二宮が立てられ二神が祭られていることこそが、二神の「幽契」が完結し、ただ今の現在においてその「幽契」が二神において果たされ続けていることを明らかにするものであったと考えられる。

以上、「五部書」における天照大神及び豊受大神に関する記述の特徴について見てきた。ここからは「五部書」の記述に即する限り、両祭神はその間に優劣のない対称的な存在と考えられると共に、約束された伊勢の地にあって、今もなおともに「幽契」を果たしつつある存在だと位置づけられているのだといえるだろう。

結論

本論では、中世伊勢神道における外宮と内宮の関係について考察した。先行研究は、伊勢神道を思想史や歴史との関係において捉えるものが多いことから、「神道五部書」の内容を神の性質に関する記述に焦点を当てて検討した。

第一章では、「神道五部書」の成立と概要について考察した。

第一節では、「神道五部書」の成立について考察した。

伊勢神道研究から、「神道五部書」の成立に関わる先行研究を取り上げ、現在の伊勢神道研究の課題点を明らかにすることによって、本論では五部書全体に共通する意図を両宮の祭神の位置づけという観点から考察することを示した。

第二節では、「神道五部書」の概要について考察した。

両宮の祭神である天照大御神と豊受大神に関する神道五部書の記述を検討することで、神道五部書全体の意図、とりわけ両宮祭神の位置づけを考察した。

第二章では、「神道五部書」における天照大神と豊受大神の位置づけについて考察した。

第一節では、両宮祭神の位置づけについて先行研究での見解を示した。

外宮と内宮の祭神問題についての先行研究をまとめ、豊受大神を内宮祭神である天照大神よりも優位の神と位置づけようとしたのか、対等・同格の神として位置づけられているのかという点で研究者の主張が分かれていることを明らかにした。

また、第二節では、「神道五部書」の記述に基づいて両祭神の関係について考察した。

「神道五部書」は外宮祭神である豊受大神を内宮祭神である天照大神よりも優位の神と位置づけようとしたのか、対等・同格の神として位置づけられているのかということについて、神道五部書における内宮と外宮の神の性質という観点から考察した。

まず、外宮と内宮を対比させる記述があることから中世伊勢神道における外宮と内宮の関係は並立であると結論付けた。また、外宮と内宮の神は根源あるいは根源の化現とされていることから、元々同一の存在であったものが働きに応じて両宮の祭神として現れたとされていたと考えられる。そして、両神が「幽契」を守り、外宮と内宮の神が対等な立場で相補的な役割を果たすことによって地上が治まっていることを示すために外宮と内宮が並立の関係であると主張したのではないかと考察した。

古代や近世における外宮と内宮の関係については、本論で検討できなかったのが、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』
神宮司廳編『大神宮叢書 度会神道大成 前篇』1955
『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』同上
『古語拾遺』『群書類従』第二十五輯 続群書類従完成会 1933
『古事記』西宮一民校注 新潮社古典集成
『五部書説弁』吉見幸和 『大神宮叢書 度会神道大成後編』神宮司廳 1955
『造伊勢二所太神宮宝基本記』
神宮司廳編『大神宮叢書 度会神道大成 前篇』（神宮司廳、1955）
『豊受皇太神御鎮座本紀』同上
『止由気宮儀式帳』『群書類従第一輯 神祇部』続群書類従刊行会 1932
『日本書紀』小島憲之〔他〕校注・訳 「日本書紀2」 小学館 1994-1998
『倭姫命世記』神宮司廳編『大神宮叢書 度会神道大成 前篇』（神宮司廳、1955）

伊藤聡 『神道の形成と中世神話』 吉川弘文館 2016
伊藤聡 『神道の中世 伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』 中央公論新社 2020
鎌田純一 『中世伊勢神道の研究』 続群書類従完成会 1998
久保田収 『神道史の研究』 皇学館大学出版部 1973
久保田収 『中世神道の研究』 神道史学会 1959
白山芳太郎 『神道説の発生と伊勢神道』 国書刊行会 2010
高橋美由紀 『伊勢神道の成立と展開』 ペリかん社 2010

岡田 莊司 「真福寺本「伊勢二所皇御大神御鎮座伝記」（大田命訓伝）の伝来」『國學院雜誌』 107 卷 11 号 2006
岡田 莊司 「「伊勢宝基本記」の成立度会神道成立の一齣」『神道史研究』 28 卷 4 号 1980
西田長男 「度会神道成立の一斑一新出の「神祇譜伝図記」に沿って一」『日本神道史研究』

伊勢神宮ウェブサイト 2024 神宮司庁
<https://www.isejingu.or.jp/about/geku/shogu.html>